ペルー・キタラフ南面登攀の記憶

王　鞍　彗　介（G登攀クラブ）

ペルー行きを決心したのは、2023年のWCM（ウィンター・クライマーズ・ミーティング）に参加した時のこと。会場は３月下旬の赤岳鉱泉だったが、WCM自体は暖冬の雨により、夜の懇親会がメインイベントとなった。その懇親会で成田啓によるペルー・ブランカ山群での遠征報告があり、強い感銘を受けたことがきっかけだった。成田・竹中ペアが行ったタウイラフ登攀の壮絶な記録はROCK&SNOW 097号等を参照していただきたいが、具体的にペルーに登りに行こうと決めた動機としては、6,000m峰のアクセスの良さが大きい。高所での登山が初めての者にとってヒマラヤはハードルが高いが、ペルーでは入山料や面倒な手続きなどはほとんど無いに等しく、アプローチも含めて圧倒的に山に取り付きやすい。同世代である二人の登攀に刺激を受けたということもあり、やはり同世代である大坪和正に声を掛け、その後高所での経験豊富な鈴木雄大が加わって三人でのペルー遠征が決まった。ワラスをベースとするブランカ山群、ワイワッシュ山群を中心に三人でネットやSNSを調べていると、キタラフ南面の美しい写真に目を奪われた。早速ガイドブックやAAJ（American Alpine Journal）で情報をあたると、どうやら南壁に二本のラインが登られているようだ。しかし僕たちが見つけた写真で見る限り、正面のリッジが明らかなキングラインのように思えた。40年以上前に初登された南東稜が山頂から見事なスカイラインで伸びているが、その中ほどからゴジラの背のような険しい尾根が南南西へと派生し、最後は急峻な岩壁となって落ち込んでいる（以後、この尾根を南スパーと呼ぶ)。人気のトレイルからもばっちりと見えるこの魅力的なリッジが未踏？という疑惑は拭えなかったが、とにもかくにもこのラインを第一候補として準備が始まった。といっても日本で三人揃って山に入ることができたのは高度順応を兼ねた出国直前の富士山のみ。冬シーズンになかなか予定が合わせられずに焦っているさなかに王鞍が左膝を痛めてしまい、結果としてチームで登り合わせることがほとんどできずに不安の残る出国となってしまった。

秘露へ

2024年５月27日、夜中にリマ空港へ到着し、空港で雑魚寝してから翌朝ワラス行きのバスに乗る。空港内は清潔で安心感もあったが、一歩外に出ればそこら中でクラクションの鳴り響く、混沌の極み。いよいよ異国にやってきたという喜びがあった。リマはペルーの首都なので、勝手に大都市の風景を思い浮かべていた。しかし造り途中なのか崩れかけなのか分からない煉瓦積みの建物が並び、路上に犬の死骸が転がっているような光景をしばらく眺めていると、なにもかもが整った日本の都市にむしろ違和感を覚え始めてくる。砂漠地帯をバスに揺られてワラスに着いた頃にはすでに辺りは暗くなり、宿にチェックインしておよそ三日ぶりのベッドに飛び込んだ。二年前に成田・竹中ペアがベースにしていたこの「Dream House」という宿は、一泊あたり23ソル／人（約千円）と格安で、貧乏クライマーには有難い。

今回登ったキタラフ（Quitaraju）は、有名なアル

パマヨのすぐ西にある6,036mのピークだ。乗合バスに四時間も揺られれば麓の村にたどり着き、すぐにトレッキングに入ることができる。ブランカ山群であればどの山も基本的にワラスから２日以内でアプローチ可能というアクセスの良さがあり、順応を終えると一旦ワラスの街まで降りてゆっくりと回復することができた。しかもワラスの標高は3,000mあるので、街にいるだけでちょっとした順応になる。トレイルに入るためにワスカラン国立公園のパスを買う必要があるが、30日間で一人150ソル（六千円程度）と安い。

一目惚れ

ワラスに到着してから三日後、慌ただしく準備を整えて早くも高所順応のためキタラフ北壁へと向かう。両脇に巨大なバッグを抱えた僕らにとって、宿のすぐ隣にバス乗り場があるのは救いだった。ハイエースの乗合バスは、まだ日も昇っていないというのにすし詰め状態で走り出し、二時間ほどでカラスに着く。そこから車を乗り換えて再び二時間ほど田舎道を走れば、カシャパンパ村の登山口だ。ヘラルドという六十がらみの男と落ち合い、ロバ三頭に荷物を括って出発。ヘラルドは熟練のアリエロ（ロバ使い）といった風体で、長年の外仕事のため黒々と日焼けした顔に深いしわがいくつも刻まれている。土色のシャツをくたびれたズボンにたくし込み、裸足に汚れたサンダルを履いているが、よく手入れされた黒いカウボーイハットをかぶる姿はなんだかとっても粋だと思った。馬に乗った彼と三頭のロバたちは、トレイルを駆けだすとあっという間に見えなくなってしまった。両岸の断崖絶壁に目を奪われながら谷間を進むと、やがて谷の奥に日を浴びて輝くタウイラフの威容が見えてくる。今夜のキャンプ地にたどり着くと、ヘラルドがのんびり芝生に寝そべっていた。タウイラフを眺めながら、我々三人と彼の分のパスタを茹でる。中南米には今回で三度目のトリップとなるが、スペイン語は一向に上達しない。どうにかこの旅の終わりまでにヘラルドとちょっとした会話ができるようになっていたい。

翌日は4,300mのアルパマヨBCまで半日歩き、キタラフ東面、アルパマヨ、リンリヒルカをバックにテントを張る。どの山もそそられるが、行きしなに目にしたキタラフ南面の迫力には遠く及ばなかった。正直なところ、今回のペルー遠征はヒマラヤへのステップとして、6,000m峰のタクティクスを学んで高所の経験を得られさえすれば上出来と僕は考えていた。だから登攀対象にそこまでこだわりがあるわけ



キタラフ南面登攀ライン（写真：鈴木雄大）

ではなかった。あわよくば初登攀を狙いたいと口にはしていたが現実味はあまりなく、むしろ何本かクラシックを登って経験を積むのもいいかも、くらいに思っていた。しかしキタラフ南面を目の前にした瞬間、僕の心は完全に持っていかれてしまった。美しいリッジが圧倒的スケールで山頂まで伸びていて、その末端からつながる理想的なラインが見て取れた。誇張抜きで、キタラフが「ここを登ってみろ」と誘いかけているように思えてならなかった。他の山は必要ない、このラインさえ登れればそれでいい。ほとんど欲情するみたいにそう感じていた。壁の前で順番に双眼鏡を回し、ここはいけそうだ、こっちはどうだろう、と三人であれこれ想像する時間が楽しくてしかたなかった。

通過儀礼

はやる気持ちを抑えながら、じっくりと500mずつ標高を上げて順応を行う。だが、氷河の末端部である4,900mで早くも王鞍に高山病の症状が現れてしまった。体験したことのない激しい頭痛と下痢で立ち上がることもままならない。仕方なく二人に5,500mまで荷揚げとロープのフィックスを頼み、一度BCまで降りる。もはやワラスまで戻らなければ回復はしなそうだ、この高度でこれじゃあ6,000mなんて到底無理だ、そもそも高所に向いてない身体なのかもしれない…などとネガティブな思考に浸食されていたが、BCで一日休養すると急激に元気が戻り、次の日には5,500mのハイキャンプまで何事もなく上がることができた。これぱかりは実際に経験するとなんとも不思議な気分だ。初めての高所でなかなかパンチの効いた洗礼を受けたわけだが、同じく高所経験のなかった大坪は最初から最後までけろりとしていた。彼は下戸なので、酒の強さと高所の強さが比例するという説はこれにて反証された。

さて、ハイキャンプはアルパマヨとキタラフの最低鞍部にあたり、日の光を反射する両雄の姿がまぶしい。何条ものアンデス襞が連なって美しい陰影を作るアルパマヨ南西壁もそそるが、今回は下降路の偵察も兼ねてキタラフの北壁を目指す。60度ほどの氷雪壁をほぼダイレクトに登るというやや単調なルートだが、日が高くなるにつれてみるみる雪が腐っていきペースが上がらない。ブランカ山群は南緯9度付近に位置するため、日本やヒマラヤとは違って北壁が日当たり抜群で日射も強烈だ。昼前にようやく主稜線に這い上がったが、山頂と思っていたピークから東側を見ると、海面から頭を突き出したクジラのような巨大な雪庇が稜線から飛び出ていた。明らかにクジラの口先がこの山の最高点であり、こちらからはとても登れる代物には思えなかった。ひとまず6,000mにタッチするという目的は達せられたため、山頂はアタックの楽しみにとっておくことにする。午後の日射しの中での懸垂下降は、落石とチリ



順応で北壁を登り、偽ピークから見えた本当の山頂に愕然とする（写真：鈴木雄大）

雪崩をかわしながら下るスリリングなものとなった。南面を登った後もおそらく同じ下降路となるため、下山は午前中か日が暮れてからにしたいと切に感じたが、愚かしいほどに全く同じ轍を踏むこととなる。

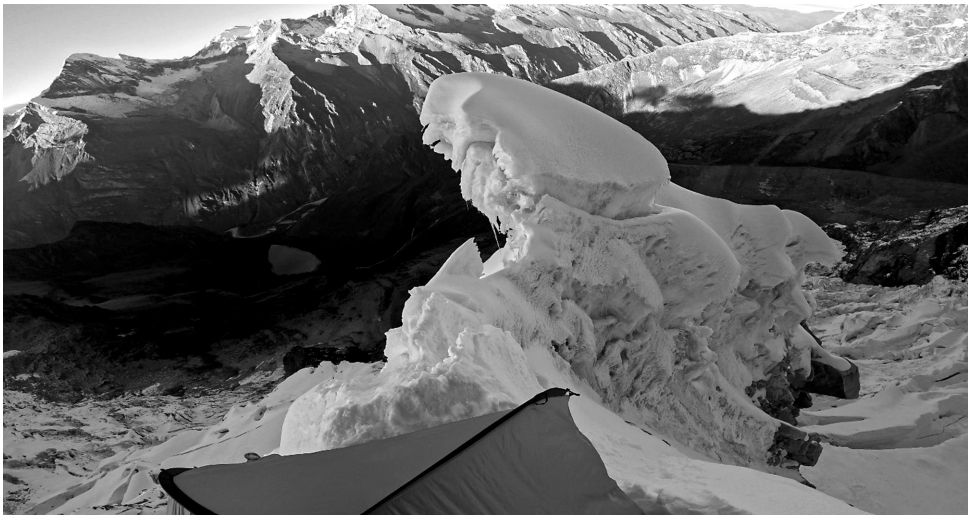
不安と期待

ワラスで一週間の待機後、６月中旬に再びヘラルドと握手をかわし、キタラフ南面を望むベースキャンプへ。こちらはアルパマヨBCとは違って僕ら以外にキャンプをする人はおらず、静かな時間が流れる。初日はロバの上がれない一段上の台地へと荷揚げし、次の日からは予想通りの雨。双眼鏡での偵察で、アタックには少なくとも４日間の好天が欲しかった。この時期のペルーであれば雨の日は稀だと聞いていたが、順応を終えてからというもの、ずっとくずついた天気が続いていた。ブランカ山群の地の利を活かせばワラスから日帰りで5,000m級の充実したクライミングもできたはずだが、件の稜線に取り憑かれてしまった僕らの前頭葉には、他の山を考えるだけの余地が残っていなかった。

雨は三日間降り続いた。その悶々とした期間に王鞍が風邪をひいてしまい、壁の中でも引きずることとなる。ようやく降りやんだ23日、荷物をデポした台地までそれなりに骨の折れる藪漕ぎをこなす。この台地はキタコチャ湖という大きな湖があり、目の覚めるほど異様に青い色の水を湛えている。キタラフ南面をバックに据えたキタコチャ湖は浮世離れした空気をまとい、おそらく南壁にトライした数隊しか目にしたことがない景色だと思うと、それだけでもペルーまで来た甲斐があるという気持ちになれた。ここまで来ても相変わらず幅を利かせる牛たちに気を遣いながら一泊し、翌日は4,800mのリッジ基部まで基地を前進させる。ありったけのパスタを胃袋に詰め込み、まだ明るいうちから就寝を決め込んだ。明日からはしばらく天気が持ちそうだ。ラインが繋がっていないんじゃないかという不安や、風邪をこじらせた喉の不調が眠りを妨げてくる。にもかかわらず、この先に待つクライミングが見かけ倒しであっさり終わってしまうのだけは勘弁してほしいという想いも同居していて、ひとり密かにおかしみを感じていた。

Day 1

３時過ぎにテントを抜け出し、平らな地表にしばしの別れを告げる。遠方から目をつけていた浅い凹角状を進んで、できるだけダイレクトに稜線につなげたい。壁の最下部に切れ込む深いルンゼをしばらく詰めると、やがて巨大なチムニーに遮られ、ここは想定通り左手の斜面を攀じる。まだ雪の付いていないボロ壁はプロテクションも気休め程度のもので、先の思いやられる幕開けとなった。それでも大坪のヘッドライトは着実にルートを切り拓き、雪氷の張



四分の一ほど宙に浮いたアタック初日のテント（写真：鈴木雄大）

り付いた大岩壁まで僕らを導いてくれた。アイゼンを装着してからも、手強いチムニーにランナウトを強いられる薄氷や、被り気味のミックスなど気の抜けないピッチが連続して飽きさせない。スラブに締まりのない雪が乗ったいやらしい凹角を、鈴木が粘りの登攀で切り抜けると、次のピッチで南スパーの稜線に飛び出た。尾根は想像以上に細く、暗くなるまで氷を削ってなんとかテントが張れるスペースを作った。しょんべんが近いからと入り口側に寝させてもらったが、テントの奥は頭も足も宙に浮いていてつらそうだった。快く入り口側を譲ってくれた二人に感謝して、水作りに精を出した。おおかた理想としていたライン採りで初日を終えることができ、尾西のビリヤニが疲れた体においしく沁みわたる。

Day 2

南スパーの稜線上を辿り、あわよくば南東稜に合流したいと考えていたが、そう簡単に事は運ばないからこそ面白い。ペルーアンデスでナイフエッジの雪稜といえば、やっかいな雪庇が付きものだ。雪庇と言っても、日本のそれを想像すると痛い目にあうだろう。八方に張り出した雪と氷の塊が尾根上にいくつも連なる様子は、原木に群生する巨大なしいたけそのもので、それぞれのキノコは自動車サイズからちょっとしたアパートくらい大きいものまである。長いこと重圧のかかった雪庇の下部は氷化し、最上部はアックスも受け付けないシュガースノーと、上下に雪と氷のグラデーションができている。そのため稜線を忠実に辿ろうとすればこの厄介なキノコたちを相手に命がけのマントルを繰り返す必要があり、自ずと尾根の側壁をトラバースすることになる。南スパー自体の傾斜も強く、いわゆる雪稜というよりは冬壁の内容だ。何度か枝尾根に張り付いたキノコを乗り越え、ときには氷の洞穴が現れたりして楽しませてくれる。スピードは上がらないが、雪庇の基部にスクリューが効くのでそれなりに安心感もあり、この先に何が出てくるのか見えないわくわくでリードの順番が待ち遠しい。ちょうど日が沈む直前に、用意されたかのようなテント一つ分の氷のくぼみが現れた。

Day 3

昨日は想定していたより先に進めなかったが、まだ三日目、焦るには早い。踏めども踏めども一向に固まらないシュガースノーに苦戦しながらも地道に駒を進めていくと、下から眺めていて最も不確定性の高かったセクションに出た。目の前に立ちはだかる悪相のミックス壁にさらなるペースダウンを余儀なくされると思いきや、鈴木のルートファインディング能力が光り、リッジ左面の氷を繋いでタイムロスを回避することに成功した。やがて空が茜色に染まるころ、ついに南東稜との合流点を意味する特大の雪庇と相まみえた。とてもまともにはやり合えないが、庇の下におあつらえ向きの回廊があり、これを利用してやりすごす。頭上に大きく張り出した雪庇は、小舟に気付きもしないといった顔で迫りくる大海賊の船首のような威圧感がある。船を回り込んだ先には、テントがぴったり収まる大きさの真っ平らな氷のテラスがあった。三日ぶりにハーネスを脱いでくつろぐことができたが、頭上に大きなツララがぶら下がっているのだけが玉に瑕。極めて快適な姿勢でなんとも居心地の悪い夜を過ごした。

Day 4

朝日が昇る少し前、刻々と変化する緋色をバックに、タウイラフの黒い影法師が美しい。ここから先はようやく、先人が足を踏み入れたことのある稜線だ。そう思うと少しだけ緊張が緩んだが、南東稜は



想像以上に複雑に入り組んだ南東稜（写真：鈴木雄大）

巨大キノコ雪の群生地。40年前と同じであるはずがなかった。あたかもベルクマンの法則が適用されたかのように、南東稜に生える雪庇は、南スパーの雪庇よりも明らかに一回り大きくなっていた。それぞれのキノコを越えるのに1，2ピッチは要するスケールだ。一つ目の雪庇は付け根を左から巻き、二つ目と三つ目は上に乗り越し、四つ目は右巻きに下ると氷の道があり…。相変わらず次のピッチの半分も見えないようなリッジ登攀で、見通しが立たないという思いが危惧になり、恐怖を煽ってくる。しかし、こんな時でもビレイ点では冗談が飛び交い、運をこちらに引き寄せることができたようだ。人当たりの良さそうな見た目の右側のトラバースが行き詰まると、厳しい顔をした左巻きに活路が見出せる。そんなことを何度も繰り返していると、次第に、山が「登れ」と導いてくれているような感覚を抱き始める。

最大の試練

だがしかし、むしろやはりと言うべきか、やがて右も左も通行止めの無慈悲な大雪庇に突き当たった。幸い、この雪庇はその他多くのキノコ雪と違って、壊れやすくて厄介な襞も無いすっきりした垂壁だ。スクリューも採れそうに見えるが、いかんせん高さがあり、真下に立って見上げると威圧感で足の震えを覚えた。これまでの雪庇越えから類推するに、上部に行くほど氷質は悪くなる可能性が高く、とりわけ最後のマントルがシュガースノーだったらと思うとなかなか気が進まない。僕がうじうじ悩んでいるうちに、鈴木は果敢にリードを始めていた。ほどよい間隔でスクリューをねじ込み、時折休みながらも順調に登っていく姿を見て、これはいける、と思った瞬間、恐ろしい叫び声が聞こえたかと思うとビレイしていた僕は体ごとアンカーに向かって投げ飛ばされた。ピンと垂れ下がったロープの先は、被った氷の陰で見えない。倒れたまま「大丈夫か！？」と叫ぶと、くそっ、という悪態が聞こえた。ゆっくりビレイ点まで降りてきた鈴木には流血や骨折も見られず心底ホッとした。どうやら体重を預けてしばらく休んでいたスクリューが突然抜けたようだ。その下のスクリューも抜け、15メートル近い墜落となった。怪我がなかったのはほとんど奇跡と言っていいだろう。中度の捻挫であっても、この場所ではかなり致命的だ。しかしまいった、壁に残ったスクリューを回収して左回りをもう一度検討すべきか、などと逡巡していると、大坪が一言「俺がいくよ」と呟いた。とりあえずスノーバーを腰にぶら下げて直上を再挑戦してみるという。頼もしい仲間たちに恵まれたものだ。二度も尻込みして前向きな言葉が出せなかった自分が恥ずかしい。大坪は先ほどの墜落を止めたスクリューまで辿り着くと、腕を伸ばして、垂直の壁

にスノーピケットを叩き込んだ。そのどことなく異様な人工登攀で、ややラインを変えながらリップまでの距離をじりじりと詰め、ついにマントルを返した。アンカーを作っているような間があり、しばらくして壁の上からガッツポーズが現れた。ナノトラクション&タイブロックで重荷を背負ってのユマールはかなり堪えるが、安堵の気持ちですっかり高揚していた。スノーピケット二本とアックスで補強されたビレイ点に合流すると、あとは少し斜面を上がれば、夕陽に染まった広い雪面が待っていた。左手にサンタクルス、右手にはアルパマヨ、そして目の前の稜線の先にキタラフの山頂が見渡せた。今山行中で一番快適なホテルを設営し、明日の登頂を確信した。今夜はぐっすり眠れそうだ。とはいえ王鞍はとにかく喉が痛く、大坪にもうつしてしまったようで夜中まで二人の咳がうるさかった。

Day 5

今朝の一発目は、雪庇の頭上を同時登攀でぐんぐん伸ばす。スタートから勢いづいて三人ともテンションが高い。その先はこれまでと同様、キノコ雪が用意してくれる抜け道を探して縫うように稜線を進んでいくと、再び正面突破が求められる雪庇に遭遇した。今度の壁は短いが被っていて、曲者の襞がたくさん付いている。ここは僕の順番で、行く先の襞を叩き割りながら慎重に登り出すが、右のアックスを打ち込もうとした瞬間に左手の氷が崩壊してフォールを喫した。褒められたことではないが、落ちる可能性も想定していたのですぐに気を取りなおし、どうにか小ハングを足元にした。威圧的なセクションではあったものの、前日の垂壁を乗り越えたことで何が出てきてももう怖くはなかった。最後に蟻地獄のようなさらさらの恐ろしいスノーブリッジを渡り、ロープいっぱい伸ばしたところで鈴木の歓声が響いた。ロープを辿って登ると、鈴木の満面の笑顔が待っていた。順応の時に見た、あのクジラの鼻先に立っているのだ。風を遮るものはなにもなく、雲がすごい速さで飛んでいる。

脱出

祝勝もそこそこに、下降の事を考えて気を引き締めた。時間はお昼前。このまま懸垂下降を始めれば、午後の強い日射で色々なものが降ってくるだろう。ひとまずクジラから一発ラペルして幅広い西稜に降り立つと、空に雲が広がり始めた。夕暮れまで待つべきかとも思ったが、食料もほとんど残っていない。話し合いの末、順応で登った北壁の下降を開始した。数回懸垂下降すると、風が消え、再び日が照り出した。降り注ぐチリ雪崩や小石をやり過ごしながら、鈴木が急ピッチでアバラコフを作って懸垂下降を繰り返し、



キタラフ山頂にて（写真：鈴木雄大）

数時間後にようやく安全圏の氷河へたどり着くと、グータッチを交わした。日は暮れども勝手知ったる道、アルパマヨBCまで闇夜をひたすら歩き続け、23時にようやく芝生の上に荷物を投げ出した。掘っ立て小屋に隠しておいたアルファ米を掘り出して貪りつき、泥のように眠った。

胡蝶の夢

ABCにデポした荷物を回収して降りてくると、ヘラルドがロバを連れて迎えに来ていた。湖畔のBCでは再び雨となり、ビニールと木の枝で作った急ごしらえの屋根の下、四人で夕食を共にした。登攀に成功したことを伝えると、いつもは寡黙な彼もにっこり笑って祝ってくれた。案の定スペイン語は大してうまくならなかったが、楽しい夜を過ごした。ワラスに戻ると、美味しいペルー料理も忙しなく鳴り響くクラクションの音も、山に入る前と何も変わらずにそこにあった。宿のおばあちゃんも相変わらずで、予約サイトで五つ星のレビューをしてくれとたびたび要求してくる。朝の7時から毎日聞こえてくる近所のダンス教室の爆音もいつも通りだった。この街でお気に入りの場所は、Alpinistのバックナンバーと美味しいチョコレートケーキがあるカフェ、それと宿の入り口まで伸びる狭い路地だ。大通りからこの路地に踏み入れると、街の喧騒がずっと遠くの海鳴りになる。いつものように路地の突き当りにあるベンチに座ってぼんやりと空を眺め、キタラフでの登攀に思い馳せてみる。あの経験はどうしてか、とても長い夢を見ていただけだったように思えてきた。風が吹けば飛ばされる羽虫のような、ちっぽけな自分の弱さをありのまま受け入れられる感覚。完全に調和のとれた自然が造り出すカオスの中で、時を忘れてひたすら攀じ登っていた時間。目が覚めて気がつくと、すべてが過ぎ去っている。でもたしかにあの時、僕らは蝶のようにひらひら舞って、自由だった。

日程

5/26　成田発
5/28　ワラス着（3,000m）
5/31～6/10　キタラフ北壁（6,000m）まで高所順応
6/11～17　ワラスにて天気待ち
6/18～22　ハツンコチャ湖BC（3,900m）にて天気待ち
6/23　キタコチャ湖（4,300m）
6/24　ABC（4,800m）
6/25～29　キタラフ（6,036m）南スパー～南東稜登攀
6/30～7/1　ハツンコチャ湖BC
7/2～5　ワラスにてレスト
7/7　La Esfingeでオリジナルルート（5.10d，800m，18p）登攀
7/10　ワラス発
7/13　成田着

遠征費用（一人当たり）

・往復航空券　25万（円）
・ポーター、入山料等　4万
・宿泊費　1万4千
・食費　4万
・その他交通費等　4万
合計　約39万円／人